

ボスう！？ボスじゃあ
ないですかッ …え、
女？ なんておんnキン
グクリムゾンツツツ 過
程などどうでも良いの
だアアアア！！！！

“7つ目”の矢

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宝くじで10億円を当てて人生ウハウハ状態のオリ主に突如現れた謎の商品…「等身大ボス」…ッ

買うか？買わないか… そんなの選択肢は一つしかないじゃあないか!!!

次回「オリ主、死す」

デュエルスタンバイ☆

目次

第4話	第3話	第2話	第1話
29	15	8	1

第1話

『ウヒします!!』

『ウッアッアッアッアッアッ (悲嘆)』

『この状況では先輩であら俺の側に近寄るなああー………ッ!』

Yes, falling love

……

「くっ、ははははっ! や、やばい腹が……ん?」

暗い部屋の中、唯一の光源である目の前の画面を眺めながら男は呟く。

「これ……ボスの等身大フィギュア……か?」

先程、パツ〇ヨーネ24時という動画を見て腹筋を文字通り壊していた男は、動画の関連商品に奇妙な品が紛れ込んでいるのを見つけた。

男がその商品の詳細を確認すると「等身大ボス」とだけ書かれており、現実では髪を染めなければまず有り得ないピンク色の髪に黒い斑点、そして網目状の明らかに寒そう

な服……服？ を着ている絵があった。

そう、ボスだ。 ビクンビクン絶頂してたら、新米ギャングに部下を掻っ攫われ、挙げ句の果てには実の娘と覚醒した新米ギャング改め、邪神コロネに永遠に殺され続ける強制糞ゲーENDを迎えたあのボスだ。

キングクリムゾンッ！からの「ボスお疲れ様です」の流れは、ジョジョを直接見たことがない人でも知っているかもしれない。

さて……この「等身大ボス」の値段だが……クソ高い。

300万もするらしい。一般市民が手を出せる値段ではない。

普通の一般市民であれば、だが。

数ヶ月前、男たなかー田中りょうすけ 良介は宝くじで1等を当てていた。 その額はなんと10億円。

普通に生活するなら、働かなくても一生生きていける金額だ。

この宝くじを当てた時——良介はかなり喜んだ。

「これでジョジョ6部以降も買えるぞ！」と。

……宝くじが当たる前の良介にはお金が無かった。

小学生の頃に両親は他界し、連絡が取れる唯一の親族である叔母さんの家に引き取ら

せたはいいものの、その叔母さんもついこの前に他界してしまっていた。

幸い、両親の遺産から学費や生活費、お小遣いが出ていたものの、

両親の墓とその維持費も両親の遺産から出ていた為に高校生からは使えるお小遣いも少なかった。

叔母さんからもお小遣いを貰ったりしていたが、その分は主に仲のいい友人への誕生日プレゼントだったり、休日に友人と外出して遊ぶ用に使っていた為、良介が趣味（ライトノベルや漫画）に使える分のお小遣いはそう多くない。

故に高校を卒業した後は大学に行くことすら諦め、叔母さんと昔から近所で仲のいい、何処かの社長らしい源さんに仕事を紹介してもらい、其処に行こうかと考えていたのだが、一宝くじが当たった為に働かなくてもいいようになってしまった。

当たった10億円は非課税なのでそのまま貰えるし、両親の墓は叔母さんに多少、出してもらっていた為、

叔母さんの墓を追加で作っても大体、維持費も含めて170万円程度で済むし、叔母さんのお葬式も源さんが色々と手続きしてくれて、遺産相続した叔母さんの遺産から費用が出してもらった為に、叔母さんの遺産を除いても、まだ9億以上ある。

ネットで調べた、人が一生に使うお金を参考にしてこれからの人生で使うであろう生

活費、家の修繕費やその他諸々の金額を計算して差し引いても、まだ7億4000万は残るのである。

——さて、良介はここで考えた。今後買うかもしれない車とか免許証とかその他諸々も一応別枠で残しておいても7億円は確実に残ってしまう。

ぶつちやけ使い道が無い。普通なら「自分へのご褒美」として高級な寿司を食べてみる、宝飾品を買ってみる：なんて思いつくものだが、良介は今までほぼ毎日自炊してきた為、外食は友人との付き合いで行くくらいで十分だし、個人で行ったとしても一般的な回転寿司で満足してしまうタチだ。というか毎日繰り返してきた行為故、自炊をしていないと良介自身が落ち着かないのである。

加えて宝飾品や金持ちが好きそうな物を買う趣味も持っていないという始末。この男、競馬やギャンブル、パチンコなど一般的な大人の趣味にすら興味を持たないのでマジで使い道が無いのだ。

大金を使うなら一番くじを大人買いするか、古本屋で漫画全巻セットを買うくらいか思いつかない、というレベル：どれも2万円以内に収まってしまうので恐らくこれから何事もなければ7億円は残り続けるのだろう。

ところで、「画面の向こうの貴方：「深夜テンション」という状態をご存知だろうか？

ネットに夢中になっていたら気がついたら深夜の時間帯。そんな状況で陥りやすい一種の状態異常的なアレだ。

——ここまで語った上で現在の良介の状態を確認して頂きたい。

- ・大金を手に入れたけど特に使い道が無い。
- ・趣味はライトノベル、漫画。
- ・ジョジョが好きだが金欠だった為、6部以降はまだ読んでいない。
- ・休日なのでネットでパッシオーネ24時などのジョジョ関連の動画を連続視聴中。
- ・現在、深夜2時。良介は休日なのをいいことに10時間ぶっ続けでパソコンの前に食いついている。

これらの情報から導き出される「結果」は……。

「300万……だと!? ……ふざけんよ……こんなの大金もってる奴しか買えねえー
じゃあないかアアアア!!? よし、俺が買うしかねえーだろーがよオオツ!!!!」
「買うって思った時……その時スデに行動は終わっているんだッ!」

なぜか表示されていた制限時間を一切無視して商品を購入した。

して、しまった。

.....

.....

.....



”ピンポーン”

「……ん、んう……」

(背中いてえな……あ、椅子に座ったまま寝てたのか)

「……………今、何時だ？」

壁時計を見る……9時か。

「そういえば……昨日、何かしたよなあ……」

寝起きのせいもあるだろうが、流石に休憩もなく食事もせず、ぶっ続けで10時間は

きつかったらしく、イマイチ 良介の頭の中はハッキリしない。

せいぜい、「昨日は楽しいことがあった！」くらいしか思い出せないのだ。

”ピンポーン”

「なんだっけなあ……楽しかったコト……楽しかったコト……」

なかなか思い出せない。楽しかった ”ピンポーン” ……。

無言で玄関に向かい、そのまま扉を開く。

「ハイハイ……どちら様ですか……」

「ーん？」

誰もいない……？ いや、それよりも、

「なんだこれ……？」

目の前にあったのはー

ほど大きい、が一つ、置いてあった。

第2話

「箱…?」

先程、良介は家のチャイムを耳に入れて、玄関の扉を開いていた。

すると、チャイムを鳴らしていたであろう人物は其処には居らず、代わりに大きいサイズの箱が置いてあった。

「大きい箱だなア〜? 人が一人、入れそうなくらいでかいぞ、コイツあ…」
(とりあえず中身を確認してみるか?)

箱の中身を確認する為に良介は箱を持ち上げようとしてー

ーえ、ちよ、重おもっ!?

普通に持てずに落とした。

…一応フォローしておく、良介の筋力が足りなかった訳ではない。
箱が重すぎるのだ。

(マジで何が入ってたんだ? これ…)

今度は箱の重さを確認した上で慎重に持ち上げる。

良介は高校時代に特別、何か部活に入っていた訳ではないのだが…何かとお世話に

なる近所の源さんが趣味で行く釣りや、老後の体力作りも兼ねているという畑仕事を手伝っていたので、自然とそれなりの筋肉は付いていたのだ。

「…つとと。あぶねー」

しかし、そんな事は関係ないと思えるくらい重い。

多少、危なげない足運びをしつつも自室に戻ってきた良介は早速箱を開けることにする。

「……ふむ。」

「どうやって開けるんだ？ これ……」

この箱、薄々わかつていた事だが、間違いなく紙とかじやない。

鉄とかそういう類の材質で出来ていると言われた方が納得出来る硬さと光沢であり、更にフタであろう部位には、つなぎ目が見当たらない。

良介が重いだけのただの箱かよ……と、脱力して箱にもたれ掛かる。

「……すると、」

「わわ……え、今めっちゃ有り得ないコトが起きた気がするんだけど……」

良介が驚くのも無理はない。何故なら箱のフタが文字通り消えたのだから。

より詳しく説明するなら、アニメでベイビー・フェイスが見せた『分解』のようにフタが「四角い穴が空くように」高速で消えていったのだ。

「……はっ！ 驚きすぎて忘れていたけど、箱の中身を確認しないと」
多分、気にするべきなんだけど、フタよりも箱の中身が気になる。
そつと中身を確認すると……

「女の子……だと？」

身長は目視で大体……140cm前後、だろうか？

年齢は10歳程度の女の子、いわゆる幼女が箱に入っていたのだった。

……

……

……

●

(さて、これ……ホントどうしよう……?)

良介の目の前には箱の中からベッドに移された幼女がいる。

元々幼女が眠っていた箱は、とにかく無駄に場所を取るので、祖父が使っていたと言
う倉庫に仕舞っておいた。

少女の容姿を改めて確認する。白人特有のきめ細やかな白い肌も目を惹くが……この子の顔……やはり美形だ。

それこそ、将来は間違いなく容姿だけでアイドルとして生きていけそうなレベルの美少女になっていそうだと思ってしまう位には顔が整っていた。

——しかし、そんな顔だとか肌の色はどーだこーだは無視するべきだ、と思ってしまう位、気になってしまうコトがある。

「なんでこの少女、ボスのコスプレしてんだ……？」

ピンクの髪に黒い斑点。髪と同色のセーターから僅かに見える網目状の……恐らく際どい例の服と、紫の独特なズボンを履いている……

……完全にボスのコスプレだ。

えー……？ 少女がしている格好じゃないでしょコレ……。

まじまじとベッドの上で睡眠中の少女を観察している良介。

ふと自分の今の構図を頭に思い浮かべ、アレ、これってハタから見たら俺、犯罪者扱いされたりするのでは……？ と無駄に冷や汗をかいていた。

そうして良介が自分は第三者目線でロリコン扱いされるか、されないかを必死で考え

ているとー幼女の目が開いた。

まだ少し眠いのか開ききっていない、ウトウトとした目で顔を良介の方に向けーその瞬間、薄いピンクの瞳を開いて驚いたように硬直した。

「……」

「…えつと…」

「……」

「…もしもし?」

「……オレは」

「あ、やつと喋った」

「ーオレは今、『終わりのはじまり』を、この身で体験しているのか…?」

(やつと喋ったと思ったら意味不明なコト言い出したぞツ!? この子…ツ!)

ーそして幼女は再び沈黙して…涙を静かに流し始めた。

「…つ、…うう…ぐずつ……」

「え”ツ、なんで泣き始めてんのツ!? 俺、なんかひどいコトしたっけ!」

「…ぐずつ…オレは…解放されたのか……」

「解放って何さツ!」

「…うう…」

「あ、答えてくれないのね……分かりましたよーと……」

「……」

「……」

……。

え、俺……この状況で、結局どうすればいいの……？

幼女の目の前で田中 良介はただただ狼狽していた。

……

……

……

●

「箱に入っていた……だと？」

あの後、突如涙を流し始めた幼女が落ち着くまで待つていた良介は、一番に「なぜ君は箱などに入っていたのか？」と、尤もな質問をした。

しかし、幼女も質問に対する”回答”を持ち合わせていないのか、眉毛をハの字にし

て困惑している。困り顔かわいいなオイ。

「心当たりは……無さそうだな。」

「ああ」

「……あつ、そう言えば名前を言うのがまだだったね。」

俺は田中 良介！ 良介って呼んでくれればいいよ」

「リョースケ……だな。オレは……ドツピオだ」

「え、ディアボロじゃねーの？」

「!？」

ガタツ……と、勢いよくベッドから立ち上がった彼女は“少し”良介を睨みながら発言する。

「……やはり、我を……帝王ディアボロだと理解した上で解放したようだな……ツ!!」

第3話

——ふと、思い出したのは……あの忌々しい出来事だった。

「誰が言った言葉」

「………だったか………」

息も絶え絶え、という感じでその男は言葉を選ぶ。

——『我々はみな 選ばれた戦士』…

「え？ くそ………だが………この世がくれた真実もある………」

ボロボロな身体を片手で支えながら言葉を告げている。

「運命はこのオレに………「時を飛ばし」………」

………「予知」ができる能力を…授けてくれた…」

男がもう片方の手を見る——震えていた。

「間違いない………それは明らかかな真実だ………」

——しかし同時に男は……この手に「運命」がある、と確信していた。

………確信していた、はずだった。

「この世の運命は我が『キング・クリムゾン』を無敵の頂点に選んだはずなのだ……オレは「兵士」ではない」

ーッ

「くそーッ!!?」

「そのオレに対してッ!!?」

「この手の中にッ!」

「あの「矢」が、この手の中にないッ!」

「よくもッ! こんなッ!」

……

「こんなことで、このディアボロが敗北するわけがないッ!」

「ここは『退く』のだ……」

（「矢」から身を隠し反撃の時期を待つ……）

（ここで一時『退く』のは敗北ではない……!!?）

(オレは頂点に返り咲ける能力があるッ！)

激昂していた男は自らはまだ敗北していないと……今は反撃の時を待つ時なのだ自らを宥め、落ち着かせようとしたーその時。

”逃がさ……ないで”

か細い声の方向へ振り向くートリツシユだった。

「ジヨルノ……あいつを」

ーッ!?

「決して……」

「逃がしたら……身を隠される」

そのか細い声が、ハッキリと聞こえたー

……

その声に応えるかのように……煙が晴れてゆく。

「逃げる……気だわ……ジヨルノ」

「感じたの……今 あいつが一步、退いたのを……」

煙の中から姿を現したージヨルノ・ジヨバーナがいた。

髪をーまるで風のように……黄金の風のように靡かせながら奴は現れた。

その手には、しっかりと「矢」が握られていたー。

ーッ!?

天に「矢」を堂々と掲げるサマはーッまるで。

「いつの間にか雨が晴れている… ジョルノだ… 「矢」を」

「つかんでいる!!? レクイエムの次に「矢」を支配するのは…!」

「ジョルノだツ!!?」

運命を支配したかのようなー

(だめだ……やはり、このオレがここで……)

ここで立ち向かわなければ……オレは……

(逃げるわけにはいかない……!!?)

(「誇り」が消える……ここでこいつから退いたら!!?)

……そうだー

(オレは「帝王」だ)

(オレが目指すものは「絶頂であり続ける」ことだ。

ーここで逃げたら……その「誇り」が失われる

次はないッ……ッ!)

.....

.....

.....



「や……やツたぞツ ついにツ！」

結局、「矢」はヤツを拒まず…ジオルノ・ジヨバーナを選んだ。

「「矢」で進化した、おまえの「ゴールド・エクスペリエンス」!!？」

「一体 何をやったのか、オレにはよく見えなかったし、わからなかったが とにかく

！」

「ボスの『K・クリムゾン』は、まったく無力だったツ!!？ ついにツ！ 倒したぞ!!？」

「でも… ちよつと待って どこかに浮かんできてる？」

「ねえ!!？ どこ!!？ 浮かんできてる!!？ あいつは!!？ 死体は？」

「……………」

「どこよツ！ 探してジオルノツ！ あいつは どこツ!!？」

.....

「いや… 探す必要はない。全てはもう終わっている…」

「ヤツはもう どこへも向かうことはない」

「終わりが無いのが『終わり』」

「それが『ゴールド・E・レクイエム』」

………

……

…



――男はG・E・レクイエムの能力により「永遠に」死に続けることとなった。

何百回……いや何千回 死んだだろうか？

しかしある時、転機が訪れた…

「ヒツ…!?! こゝ、今度はなんだ!?! 今度は『どうやって死ぬ』……!?!」

――その男…かつて、パツシヨーネの“ボス”まで上り詰めた帝王ディアボロはひたすらに怯えていた。

ヤク中のゴロツキに刺されて死んだり…車にひかれて呆気なく死んだりもした。

他にも、帝王切開されて死んだ、占い師のようなブ男に消し炭にされて死んだ。

足元に落ちていた道具か何かが爆発して死んだ、穴ぼこチーズっぽい死体にチューチュー吸われて死んだ。

何故か歩いてきた重量を操る緑色のスタンドに殴られて死んだ：隕石が直撃して死んだ。

子供にアメちゃんをあげていた古代の戦士っぽい筋肉男にグツグツのシチューにされて死んだ：お母さんヤギに切り裂かれて死んだ。

道を通りかかった男にいきなり「かかったなアホが！」と罨に嵌められ死んだ：太陽から落ちてきた奇妙な格好をした男に「私は愛と正義の戦士！ 宇宙刑事カーズ！」と名乗られてうめき声をあげる暇もなく殺された。

仲良く手を繋いで「早人よくやったなア〜！ 玉転がしで2位になるなんて流石、私の息子だ！」と、少し引くぐらいに息子を可愛がっている金髪の男が歩いてくるのを目撃してしまい、なぜか爆発して死んだ。

強風で飛んできた看板に押し潰されて死んだ：空から落ちてきたロードローラーにぶつ潰されて死んだ。

コーヒীগムを食べている犬とチェリー味のキャンディをレロレロ舐めているガタイのいい学生に殴られて殺されたり：猫に引っかかれて死んだりもした。

ーーオレはあと何回、死ねばいいんだろう………？

………

……

……



男は……いつしか……考えるのをやめていた。

いくら抵抗しても、いくら逃げようとしても……結局は死んでしまうのだから。
ならーもう考えるのはよそう。

ー男の心の中は、いつのまにか晴れていた。

青い空を見上げながらゆっくりと鮮やかな緑に身体を横たえる。

…こんなことしてたら、またすぐに死んでしまうのだろうか。

—それでもいいか。

男は、ゆっくりと…腕を枕代わりにしながら、穏やかな顔立ちで…すやすやと眠ってしまった。

だからこそ気がつかなかった。

男の近くに広がっていく、奇妙な「光の穴」の存在に……。

……

……

……

●

「な……………じよ……………ンだ……………」

(う、うん…)

人の気配を感じて、ディアボロは目を覚ました。

「…ああ…また死ぬのか……」という悲観と、まあ、そうなるなら仕方ないか…という、諦めた心。

目を瞑りながら、ただ、「その時」を待つ。

数秒。 十秒。 数十秒。 一分……………。

「…長いな…いつもなら、もっと早く死ぬのに……………」

ゆっくりと目を開けて「…目の前にいる青年と、己の側にたたずむ、紅い人型の存在に気づく。」

(……………)

ジョルノ・ジョバーナのG・E・レクイエムと相対したあの時から失った……………自らの絶頂の象徴。

スタンドが…出せていた。

あの地獄から抜け出せた……？

「……」

「……えつと……」

「……」

「……もしもし?」

「……オレは」

「あ、やっと喋った」

「――オレは今、『終わりののはじまり』を、この身で体験しているのか……?」

――オレは……もう死ななくていいのか……?」

その事実気づいたら――頬を何か流れていった。

込み上げてくる感情に流され、幼な子のように泣いていた。

「……っ、……うう……ぐずっ……」

「えッ、なんで泣き始めてんのッ!? 俺、なんかひどいコトしたっけ!」

「……ぐずっ……オレは……解放されたのか……」

「解放って何さッ!？」

——ああ……もう、死ななくていいのか……。

「……うう……」

「あ、答えてくれないのね……分かりましたよーと……」

——オレはただ……泣いていた。

第4話

「……やはり、我を……帝王ディアボロだと理解した上で解放したようだな……ッ!!」
「……解放?」

えーと。……どういう意味だ?

ディアボロのコスプレだらって指摘したら、なんか急に睨んできて、しかも急に脈絡のない単語が飛び出して来たんだが。いや、どういうことだよ(困惑)

とりあえず、このまま睨まれても居心地が悪いので、俺が彼女に何か悪い事でもしたのかとを罪の所在を確かめるが、パツと思いつく限りでは思い当たるフシはない。なので、彼女が口にした『解放』という単語から身の錆を確かめる。

カイホウ。…解放? え、何から?

この女の子を俺が解放した? 刑務所にでも入れられてたつてことか?

…なーんて考えてみたが、そもそも俺そんなことはしてないし、入ったことはあつても出したことはないからな。それに、この子は今、『ディアボロだと理解した上で』と言っていた。

それではまるで、「この子がディアボロ」で、俺が『解放』——…物語のことを言っ

ているのなら、『ゴールド・エクスペリエンス・レクイエムの“能力”から解放した』みたいじゃないか。

そこまで考えた良介は、ふと、最近…そう、ごく最近、何か似たようなことがなかったかと引つ掛かりを覚えた。

(ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム…ディアボロ…、そうだ。似たような…何か…。)

そう、そうなんだ。『完璧にかぶっているわけじゃあない』。似たようなこと、何かそれに近いことが…あつた? ような…

——ボス…?…ボス…:BOSS…:ジョージア…)

微糖よりもエメラルドマウンテン…——駄目だうん。思い出せねーわ。

いい感じに思考が明日の方向へ見切り発車したところで頭を振り、リセットする。いや、小骨がのどに深くぶつ刺さった程度の引つ掛かりはあるんだけどさ、肉に突き刺さり過ぎて出てこんでもいいような記憶ばかりがどばーつと出てくるんだよ。

ほんの些細ささいな引つ掛かりなんだけどな…とこの間なんとわずか0.5秒の思考を終了し、ついでに明日の献立も考えつつ、今の状況を冷静に再考慮してみる。

ジョジョ…:漫画の、第5部の最後の話を言ってるんだよな?。

見てみなさいよ、この整った顔。何処の美人局だよ。いやこんな美少女、ぜってえ美人局にならねーわ、俺が親なら心配して監禁してるわ（過激派）

しかも、めっちゃ肌白いし、生まれたばかりの赤ちゃんみたいでつるつるしてて綺麗だし、髪サラツツラだし。何で自信がないの？なんで自分に自信を持ってないのか。

いや、持てよ。自分の顔に自信を持てよ！

頑張れ頑張れできる絶対できる頑張れもつとやれるってやれる気持ちの問題だ頑張れ頑張れそこだ！そこで諦めるな絶対に頑張れ積極的にポジティブに頑張る頑張る！タカキも頑張ってるしお前もこの手鏡見て自信を持たないと！

「というわけで、はい。鏡」

「この俺のどこが女みてーだつてえ？馬鹿にすんのも大概にしろよつてはあああああああああああッ?!?!?」

「女の子でしょ?!?!?」

「はあああああああああああああ?!?!?!?!?」

「可愛らしい」

「あああああああああ?!?!?!?!?」

「YOJO」

?!?!?!?!?

「ほわあああああああ?!?!?!?!?」

あ、泡吹いて気絶した。

.....

.....

.....



「.....ウ」

俺は一体.....

「目、覚めた？」

紅茶飲む？と能天気な目の前の男が暖かいタツツアマグカップを差し出してくる。陶器てのひらに掌てのひらが触れると、じんわりと熱が伝わってきてあんし——じゃない。

「い、いらんッ！」

つい、自然に受け取ってしまったがコイツは何故か俺の名を知っていた。しかも、寝ぼけていた頭がハッキリしてきたから思い出したが、俺の身体は何故か少年の身体ではなく、女のガキになっていた.....クソッ！思い出して来たら腹はらが立ってきたぞ.....ッ！

よりのもよってこの俺が、こんなワケのわからないノーテンキな男の前で！ あ、あんな醜態を晒すなどは……ッ!!

許せん……ここが『何処』なのか……だとか、今後の行動のための『情報』をしつかりと抜き取ってから始末するつもりだったが、もういい……今ここで！俺はコイツを消すッ!!

キング・クリ——

「あ。そういや、まだ君の名前を聞いてなかったよね」

「……なんだと？」

こいつは今何と言った？ 『名前を聞いていない』？知らないだと？

——そんなわけがあるかッ!!

「——ッ、いい加減にしろッ！テメエもしつかりと口に出して言っていたじゃあないかッ！」

その上、ボスだとい？

この俺がギヤングの、パッションのボスだつてこともしつかりと認識しているじゃあないか……ッ！

それをこんな……よくもぬけぬけと……ッ!!

「もしかして『ディアボロ』のこと？」

「それ以外何があるってんだよこのダボがア——っ！」

「——いや、ドツピオもディアボロも、どっちも漫画のキャラクターだろ？」

——は？

……ハア!?

「ま……漫画……だとツ!？」

漫画? コミックスだと? 俺が?

創作だと? 空想上の存在だと……ツ!

何をトチ狂ったことを——!

「ホラ、これ」

「言つて、るん……?」

奴が、近くの棚から一冊抜き出し、見慣れない文字のコミックスを開き、見せてくる。そこには、何故か、見覚えのある気がする、特徴的な格好の奴らが居、て……?

ガタガタと震える。動悸が止まらない。吐き気がする。

情けないだとか考える余裕はない。たつた今、なくなつた。

「なん……だ、これ……は……」

なぜなら、なぜならそこには……そこに、は

「ジヨジヨの奇妙な冒険、第5部の——

——ラスボス『ディアボロ』でしょ?」